PDF で提出してください

書 式 6

助成番号	２２－G39

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

（MS Word）

【氏名】
ウルルード・ズンベル（ZHONG BOER）
【所属】（助成決定時）
昭和女子大学大学院　生活機構研究科　博士後期課程

【研究題目】
モンゴル語近代術語体系の形成に関する実証的研究—ブリヤート・モンゴル知識人による刊行物を中心に—

【研究の目的】（４００字程度）

モンゴルは 1911 年に清朝からの独立を宣言し、1921 年の革命を経て、1924 年にソ連に続く世界二番目の社会主義国のモンゴル人民共和国となった。この独立運動・近代国家形成の過程で、ロシア領内ブリヤート・モンゴル出身の知識人たちは、モンゴル人民共和国の近代的新聞雑誌の発行、学術機関の創設、教育制度の構築などの面で大きく活躍した。また、当時のモンゴルの国家イデオロギーとなったマルクス・レーニン主義著作のモンゴル語翻訳事業にも従事した。それにより、モンゴル語の中に、ロシア語を介して多くの近代的術語が導入された。しかし、20 世紀を通して、モンゴルの歴史研究は社会主義政策の影響を受け、唯物史観に基づき行われていたため、これらの知識人の活動に関する実証的研究は、1990 年代のモンゴル民主化までほとんどなされず、いまだに研究の蓄積が少ない。本研究の目的は、日本とモンゴル国に所蔵されている、これらの知識人による翻訳文献、対訳辞書、定期刊行物の所蔵を確認し、そのモンゴル語術語の翻訳・生成を体系的に検証することにある。

【研究の内容・方法】（８００字程度）

助成期間中、2 回にわたりモンゴル国ウランバートルで資料調査を行った。そして、日本国内では京都にある羽田記念館のほか、東京にある東洋文庫と東京外国語大学附属図書館で資料の複写と調査を実施した。その結果、主に次の四つの資料に注目し、モンゴル語文語の解読に基づく文献学的手法を用い、その術語がもつ意味や概念に対する考察を行った。

① 1912 年締結された「露蒙協定」はモンゴルが経験した初めての国際条約であり、モンゴルは帝政ロシアに対し、多くの商工業上の特権を認めた。両国の交渉にあたり、ブリヤート・モンゴル人が通訳者を担った。協定文には近代的経済用語が用いられている。その中から、報告者は協定文のモンゴル語テキストから「施設（公司）」、「工業」、「不動産」、「自然資源」という四つの術語に注目し、同時期のモンゴル語定期刊行物を用いつつ、その由来を分析した。

② ブリヤート・モンゴルの高名な知識人ジャムツァラーノは、1913 年のモンゴル国初の啓蒙的雑誌である『新しい鏡という書』で知られる。当該誌の創刊号には「絶対君主制」、「立憲君主制」、「共和制」などの政治体制について紹介した記事がある。報告者はモンゴル語訳『万国公法』、定期刊行物『蒙話報』と『蒙文白話報』、そして訳著『諸外国の概況』との比較を行い、この三つの政治体制のモンゴル語術語がどのように成立したかを考察した。

③ ジャムツァラーノは 1920 年代初期に『世界に諸学問が広がったことに関する略述』という小冊を著し、モンゴルに科学、そして自然科学の基礎的な概念である「元素」、「分子」、「原子」などを紹介した。それにあたり、当時のモンゴルに浸透していた仏教による知識と学問が活用された。例えば、科学は「輪廻の苦」から解脱するための方法を提示するものとされ、また、「元素」は仏教用語の「大種」で表記されている。報告者はこれらの自然科学術語に着目し、1930-1940 年代の辞書と術語集と比較しつつ、モンゴル語自然科学用語の形成を検証した。

④ モンゴルにおけるマルクス・レーニン主義著作の翻訳事業は 1925 年から始まり、同年、エンゲルスの『共産主義の原理』のモンゴル語訳が刊行された。訳者は特定されていないが、同年に『共産党宣言』をモン

ゴル語に翻訳したイシドルジが関与したと考えられる。『共産主義の原理』は 1969 年に現代モンゴル語に重訳されているため、この二つのテキストにおける訳語の比較を行った。その際、1925 年訳のテキストにおける「プロレタリア」、「ブルジョア」などの階級に関する用語に加え、特に「革命」、「生産」、「社会」などの用語のモンゴル語表記を分析した。

【結論・考察】（４００字程度）

上述した四つの資料に対する考察により、次のような知見を得ることができた。

① 露蒙協定のモンゴル語テキストにおける「施設（公司）」、「工業」、「不動産」、「自然資源」の術語は、同時期のモンゴル語定期刊行物には確認されない。そのため、これらの語は当時のモンゴル政府、つまり、翻訳者が独自に造語したものであったと考えられる。

② ジャムツァラーノ編集『新しい鏡という書』誌における「絶対君主制」、「立憲君主制」、「共和制」の三つの術語は、同時期の翻訳文献とモンゴル語定期刊行物のいずれの術語表現とも異なる。また、現代モンゴル語に定着したのは『新しい鏡という書』誌の術語である。そのため、ジャムツァラーノによる術語が結果的に現代モンゴル語に定着したということになる。

③ ジャムツァラーノ著『世界に諸学問が広がったことに関する略述』の中で登場した「物理学」、「化学」のモンゴル語表記は、現代モンゴル語と同様にロシア語からの借用語であった。そして、「元素」、「分子」、「原子」などに用いられた仏教用語は、1930-1940 年代の辞書と術語集に部分的に収録され続けていた。

④ 1925 年のモンゴル語訳『共産主義の原理』の一部の基礎的な訳語は、1969 年の現代モンゴル語訳と異なるものであり、また、訳語の揺れが多数確認された。その中で、特に「工業」、「生産」、「社会」の訳語が安定せず、例えば「社会」は「人類」、「国」、「民衆」などを意味する語で訳されている。このように、1925 年のモンゴル語訳『共産主義の原理』を通して、マルクス・レーニン主義のモンゴル語の形成の一端を解明した。

以上のように、ブリヤート・モンゴル出身の知識人は、1910-1920 年代のモンゴルにおける外交交渉、政治、教育に大きく貢献した。その過程の中で、彼らによる刊行物、著作、訳著などは、モンゴル語に経済、政治、科学、社会等の近代的な概念を表す新語をもたらし、モンゴル語近代術語体系の形成に重要な役割を果たした。